



30年9月14日  
文教大学附属小学校

## 研究主題 「学ぶことを楽しむ！」

～文教大学附属小学校型 ディープアクティブラーニング

学びの深化を目指して「自ら問い続ける子どもを育てる授業」～

9月14日に社会科の研究授業を行った。3年2組は『大田区の今と昔』と4年1組は『住みよいくらし ②たいせつな水』を単元のテーマとして取り扱った。

まず3年生では「海苔の養殖場を埋立地にする必要はあったのか」をめあてに海苔の養殖をしていたが田中正一さんへのインタビューを読んで、自分の心が動いたところや驚いたところを線を引き、自分の考えをまとめるようにした。その後、めあてに対して、自分の考えをノートにまとめていた。授業中は発言しやすい雰囲気であり、濱崎教諭は児童の発言が資料を根拠に発言することを意識させることで児童の学びが深まった。



4年生では浄水場のはたらきや役割を教科書やICTを活用し調べていた。資料から必要な情報を選択し、ノートに書いてからカードに書き写した。松川教諭が机間指導を行い、内容に悩んでいる児童へ支援をしていた。同じような方法で調べ学習を行ってきたため、児童も慣れていて、浄水場のはたらきや役割を調べていく中で、出来上がっているカードを全体で共有することで児童にとって、とても参考になっていた。



今回の研究授業は学芸大学附属小金井小学校の岸野存宏先生を講師としてお招きした。授業後に指導と講評をいただいた。アクティブラーニングが必要になった経緯から教えていただいた。『気づき』、『問い』をもたらす他者が存在すべきであり、それにより答え求める受け身の姿勢よりも自ら『問い』を求める児童に育つ。



ディープアクティブラーニングを促進するためにファシリテーターとしての教師像に必要である①可視化、②共有化、③焦点化を要素として考え説明していただいた。また、ディープアクティブラーニングをすることが目的でなく、ディープアクティブラーニングで何を学ばせるかがポイントである。自発的な活動の下、児童が成功体験を得られたかどうかを意識する必要があると意識的に活動することができる

社会科の授業だけでなく各教科の特性を活かしたディープアクティブラーニングができ

るよう日々研鑽していきたい。